

## 「茶旅」

(21)

# スリランカ 茶業の悩みを見る

”こぼればなし”

コラムニスト 須賀 努



世界的な紅茶の産地であるスリランカにはこれまで3回行っており、そのお茶の歴史を勉強する傍ら、茶畑にも出向き、実際の様子を見てきている。今回はスリランカ紅茶専門店店主の誘いを受け、2〜3日で10軒以上の茶工場を回り、プロの目線も体験できた。スリランカ茶業の現状と問題点について、自分なりの勝手な見方を紹介してみたい。因みに歴史的には仏教と何ら関係がないのに、茶が中国から持ち込まれたことが興味深い。

2009年に26年続いた内戦が終結したスリランカは、他のアジア諸国に比べて経済成長が遅れており、それを取り戻すべく、近年急速な発展

を推進してきた。その結果、高速度路や港湾、空港など、インフラは徐々に整ってきているが、その一方で急激な物価上昇に見舞われ、給与の上昇はそれに追いつかず、庶民の生活は厳しいものとなっている。茶業も例外ではなく、物価上昇によるコストアップはかなり激しい。それに加えて、人件費の高騰も見逃せない。

茶工場の裏側を歩いていくと、ヒンズー教の寺院に行くわすことがある。これは現場の作業労働者として、イギリス植民地時代に南インドから連れてこられたタミル人の子孫が今もここに住み、労働者としてスリランカ茶業を支えていることを窺わせる目印だ。決して豊かとはいえない家

に住み、何代にも渡って、茶園の重労働の担い手となってきた、彼らタミル人なくして、手摘みされるスリランカの低価格茶はなかつただろう。だが経済発展の波の中、今回訪れたティンブラの茶園に住んでいたタミル人の若者たちは、コロンボなど都会に憧れ、豊かさを求めて既に出て行ってしまっていた。若い労働者を失くした茶業の将来に不安な影を落としている。

ではコストアップを吸収できるだけの製品価格の上昇はあるのだろうか。残念ながら、スリランカでは植民地時代より、販売の中心はコロンボのオークションであり、ヨーロッパの大手企業などの大量購入を前提とした仕組みが出来上がっている。だが、世界的な景気低迷、茶葉の売り上げ減少を受け、総じていえば価格は上がるどころか、下げ圧力が掛かるという現実がある。これにはケニア産紅茶

などの品質向上があり、コストも安い低価格品との競争が厳しくなっていることを示している。因みにケニアの紅茶作りにはスリランカ人が指導しているケースもあるということだから、品質が接近してくるのも頷ける。

コストは上昇し、価格が上がらなければ利益は当然縮小していき、中には損失を出しているところもある

と聞く。キャンディなど伝統的な茶産地では茶工場の廃業が続いており、茶葉を摘んでも、遠くの茶工場まで運ばないと製茶できないとの話を何度も聞いた。中には有名メーカーが他社に買収される、といったケースも出てきており、好きだった銘柄の味が変わってしまった、という事例も出てきている。ある関係者は『このままの状態が続けば、倒産する茶工場が続出する危険がある』と恐ろしいことを口にした。

生産した茶葉のほとんどをオークションに出品している茶園。中には新たな取り組みを始めているところもあった。ティンブラのある茶園では、白茶や烏龍茶の製造を試みており、中国や台湾の技法をも取り入れたい、との発言もあった。また標高が低いこともあり、従来あまり注目されていなかったルフナの茶園を初めて訪れたが、若い企業経営能力を持ったマネージャーが招へいされており、『オーク

ションを脱却して、個別の輸出に力を入れていきたい』との話しが印象的だった。既に中東やヨーロッパ市場の開拓を始めており、中国へのアプローチまで視野に入っている。

因みにルフナでは、各家庭が庭で茶樹を栽培しているなど、スリランカでイメージする大規模茶園とは、一線を画している。訪れた茶園では、5000もの小規模農家から茶葉を集めて、製茶していた。その茶園管理指導の徹底などは、従来の伝統的な茶業からは少し距離を置き、独自の手法での茶作りが見られるような気がしている。これからのスリランカ茶、茶葉の質はよいのだから、もう少し個性的な茶が必要ではなからうか。総じていえば、スリランカ茶業も、日本などが辿った道を徐々に進んでいるように思う。これからどうするのか、茶業が国の主要産業あるこの国に突き付けられた課題は実に重い。

(すが つとむ)



ティンブラで茶摘みするタミル人女性